

パーシャルデンチャーの設計についての提案

伊藤圭一（歯科技工士学科）

パーシャルデンチャーの設計は、①支持、②把持、③維持の順序で行うことが基本となる。これは義歯に加わる力の大きさの順に考えるということである。構成要素を金属でワンピースにて製作する金属床は、一般的なレジン床義歯に比べて強度と装着感に優れる。金属床の特長を考慮し、新たな設計を検討した。すなわち、支持、把持要素にはコバルトクロム合金、クラスプの維持腕には貴金属合金を用いる設計である。この他に、歯科用合金の特性について説明を行った。

認知症とMCI

阿志賀大和（専攻科保健言語学専攻）

ADNIと呼ばれるADの大規模臨床観察研究が行われており、そのデータの中のLogical MemoryにおけるMCIおよびADの基準を満たし、MMSEが24～26点で、CDRが0.5点の者を対象に、それらの被験者のFAQの値、t-tau/A β の値、FDG-PETの値を用いて、MCIとADに分類することが可能かを検討した。

その結果、FAQとFDG-PETの左AngularではMCIとADの間に統計学的に有意な差を認めたが、t-tau/A β とFDG-PETの右Angular、左右のTemporalについてはMCIとADの間に統計学的に有意な差は認めなかった。また、FAQのROC曲線下面積は0.8345であった。

以上から、ADNIのLogical Memory、MMSE、CDRの基準にFAQを追加することでMCIとADをより正確に分類可能となることが示唆された。

さらに、FAQは介助者に対する質問表であるため、症例の日常生活上の買い物や食事といった複雑な動作に着目することでADの早期に発見つながると考えられる。

第59回（通算第142回）：平成24年9月27日（木）

（座長：中澤孝敏）

本学学生の喫煙実態と禁煙支援のあり方の検討

本間和代（歯科衛生士学科）

昨今、喫煙による健康への影響がクローズアップされ、国民の禁煙意識は高まってきたが、若者の喫煙率は低下傾向にない。本学では入学と同時に専門医を招聘し、禁煙教育を行うと同時に、歯科衛生士学科においては、歯科衛生士業務で患者の禁煙支援を行うことが求められる時代となり、その教育も行われるようになった。そこで、学生の喫煙実態を把握し今後の禁煙教育の在り方を検討することを目的に、平成24年7月にアンケートを実施した。対象は、歯科技工士学科および歯科衛生士学科学生251人（男34人、女217人）である。

その結果、喫煙者は23人（9.2%）、過去喫煙者は6人（2.4%）で、保護者の約半数は子供の喫煙を知らなかった。喫煙者・過去喫煙者の81%は、気分転換や人の勧め、好奇心などの動機で、中学・高校時代に喫煙を始めていた。また、1日の喫煙本数は6～10本が52%と最も多く、食後や放課後の比較的にリラックスできる時間帯に多く喫煙していることが分った。しかし、喫煙者の87%は過去に禁煙を試みたが失敗して現在に至っている。以上より、本学入学以前に喫煙を開始している者が多く、簡単に禁煙に導くのは困難であることが伺えるが、喫煙が健康に悪いことを自覚し、できれば止めたいと思っている学生が多いことから、医療従事者を目指す学生の健康を考え、禁煙支援のための大学としての継続的支援体制の確立と、本学入学後に喫煙を開始する者を出さないための取組みが急務であると考えられる。

本学附属歯科診療所歯科技工室における感染対策の現状と改善に向けて

榎並拓也（附属歯科診療所DT）

青柳洋平（沖歯科工業）

飛田 滋（歯科技工室長、歯科技工士学科）

現在、医科の世界では感染予防対策としてスタンダードプレコーションの概念が普及している。しかし、日本の一般歯科診療の現場ではスタンダードプレコーションの徹底は難しい側面を抱えている。唯一「日本補綴歯科学会指針」なる感染対策ガイドラインがあるだけである。そこで本学の診療所と歯科技工室の実態をこのガイドラインに照合し問題点と